

# たき火

国木田独歩

青空文庫



北風を背になし、枯草白き砂山の岨がけに腰かけ、足なげいだして、伊豆連山のかなたに沈む夕日の薄き光を見送りつ、沖おきより帰る父の舟ふね遅しとまつ豆子ずしあたりの童わらべの心、その淋さびしさ、うら悲しさは如何あるべき。

御最後川の岸辺に茂る葦あしの枯れて、吹く潮風に騒ぐ、その根かたには夜半よわの満みち汐しおに人知れず結びし氷、朝の退ひきしお潮に破られて残り、ひねもす解けもえせず、夕闇に白き線を水みぎわに引く。もし旅人、疲れし足をこのほとりに停とめしとき、何なに心こころなく見廻わして、

何らの感もなく行過ぎうべきか。見かえればかしこなるは哀れを今も、七百年の後にひく六代御前ろくだいごぜんの杜もりなり。木こがらしその梢こすえに鳴りつ。

落葉を浮かべて、ゆるやかに流るるこの沼ぬま川かわを、漕こぎ上のぼる舟、知らずいずれの時か心こ地ちよき追おいわけけの節ふしおもしろくこの舟より響きわたりて霜夜の前ぶれをか為なしつる。あらず、あらず、ただ見るいつもいつも、物いわぬ、笑わざる、歌わざる漢子おのこの、農夫とも漁人も見分けがたきが淋ろしげに櫓ろあやつるのみ。

鍬くわかたげし農夫の影の、橋とともに朧おぼろにこれに映うつつる、かの舟、音もなくこれを掻かき乱しゆく、見る間に、舟は葦がくれ去るなり。

日影なおあぶずりの端に躊躇たうころ、川口の浅瀬を村の若者二人、はだか馬に跨りて静かに歩まず、画めきたるを見ることもあり。かかる時浜には見わたすかぎり、人らしきものの影なく、ひき上げし舟の舳に止まれる鳥の、声をも立てて翼打ものうげに鎌倉のほうさして飛びゆく。

ある年の十二月末つ方、年は迫れども童はいつも気楽なる風の子、十三歳を頭に、九ツまでくらいが七八人、砂山の麓に集まりて何事をか評議まちまち、立てるもあり、砂に肱を埋めて頬杖つけるもあり。坐れるもあり。この時日は西に入りぬ。

評議の事定まりけん、童らは思い思いに波打ぎわを駈けめぐりはじめぬ。入江の端より端へと、おのがじし、見るが間に分れ散れり。潮遠く引きさりしあとに残るは朽ちたる板、縁欠けたる椀、竹の片、木の片、柄の折れし柄杓などのいろいろ、皆な一昨日の夜の荒の名残なるべし。童らはいちいちこれらを拾いあつめぬ。集めてこれを水ぎわを去るほどよき処、乾ける砂を撰びて積みたり。つみし物はことごとく濡いたり。

この寒き夕まぐれ、童らは何事を始めたるぞ。日の西に入りてよりほど経たり。箱根足柄の上を包むと見えし雲は黄金色にそまりぬ。小坪の浦に帰る漁船の、風落ちて陸近ければにや、帆を下ろし漕ぎゆくもあり。

がらす砕け失せし鏡の、額縁がくぶちめきたるを拾いて、これを焼くは惜しき心地すという児の丸顔、色黒けれど愛らし。されどそはかならずよく燃ゆとこの群の年かさなる子、己おの力があまるほどの太き丸太を置きつついえり。その丸太は燃えじと丸顔の子いう。いな燃やさでおくべきと年上の子いきまきて立ちぬ。かたわらに一人、今日は獲もののいつになく多きようなりと、喜ばしげに叫びぬ。

わらべらの願いはこれらの獲物えものを燃やさんことなり。赤き炎ほのおは彼らの狂喜なり。走りてこれを躍り越えんことは互いの誇りなり。されば彼らこのたびは砂山のかなたより、枯草の類たぐいを集めきたりぬ。年上の子、先に立ちてこれらに火をうつせば、童らは丸く火を取りまきて立ち、竹の節の破るる音を今か今かと待てり。されど燃ゆるは枯草のみ。燃えては消えぬ。煙のみいたずらにたちのぼりて木にも竹にも火はたやすく燃えつかず。鏡のわくはわずかに焦げ、丸太の端よりは怪しげなる音して湯気を吹けり。童らはかわるがわる砂に頭押しつけ、口を尖とがらして吹けどあいにくに煙眼に入りて皆の顔は泣きたらんごとし。

沖おきははや暗うなれり。江の島の影も見わけがたくなりぬ。干瀉ひがたを鳴きつれて飛ぶ千鳥の声のみ聞こえてかなたこなた、ものさびしく、その姿見えすとみれば、夕闇に白きものはそれなり。あわただしく飛びゆくは嶋しづ、かの葦間あしまよりや立ちけん。

この時、一人の童たちまち叫びていいけるは、見よや、見よや、伊豆の山の火はや見えそめたり、いかなればわれらが火は燃えざるぞと。童らは齊ひとしく立ちあがりて沖かたの方をうちまもりぬ。げに相模湾さがみわんを隔へだてて、一点二点の火、鬼火おにびかと怪しまるるばかり、明滅し、動揺せり。これまさしく伊豆の山やまびと人、野火を放ちしなり。冬の旅人の日暮れて途遠みちきを思う時、遥はるかに望みて泣くはげにこの火なり。

伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆと、童ら節ふしおもしろく唄い、沖の方のみ見やりて手を拍うち躍り狂えり。あわれこの罪なき声、かわたれ時の淋びしき浜に響きわたりぬ。私語ささやくごとき波音、入江の南の端より白き線すじ立て、走りきたり、これに和わしたり。潮は満ちそめぬ。

この寒き日暮にいつまでか浜に遊ぶぞと呼ぶ声、砂山のかなたより聞こえぬ。童の心は伊豆の火の方にのみ馳はせて、この声を聞くものなかりき。帰らずや、帰らずやと二声三声、引続きて聞こえけるに、一人の幼なき児こ、聞きつけて、母呼びたまえり、もはやうち捨て帰らんといい、たちまちかなたに走りゆけば、残りの童らまた、さなり、さなりと叫びつ、競うて砂山に駈かけのぼりぬ。

火の燃えつかざるを口惜くやしく思い、かの年かさなる童のみは、後振あとりかえりつつ馳せゆきけるが、砂山の頂いただきに立ちて、まさになたに走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。

ちらと眼まなこを射いたるは火なり。こはいかに、われらの火燃えつきぬと叫べば、童ら驚ろき怪しみ、たち返えりて砂山の頂に集まり、一列に並びてこなたを見下ろしぬ。

げに今まで燃えつかざりし拾ひろいぎ木の、たちまち風に誘われて火を起こし、濃き煙うずまき上り、紅の炎の舌見えつ隠れつす。竹の節の裂われる音聞こえ火の子舞い立ちぬ。火はまさしく燃えつきたり。されど童らはもはやこの火に還かえることをせず、ただ喜ばしげに手を拍ち、高く歓声を放ちて、いつせいに砂山の麓ふもとなる家路のほうへ馳はせ下りけり。

今は海暮れ浜も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。この淋しき豆子の浜に、主あるじなき火はさびしく燃えつ。

たちまち見る、水ぎわをたどりて、火の方かたへと近づきくる黒き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて浜に出いで、浜づたいに小坪街道へと志こころざしぬるなり。火を目がけて小走りに歩むその足音重し。

嗶しわがれし声にて、よき火やかすかに叫びつ、杖なげ捨てていそがしく背の小包を下ろし、両りょうの手をまず炎の上にかざしぬ。その手は震い、その膝ひざはわななきたり。げに寒き夜かな、いう齒の根も合わぬがごとし。炎は赤くその顔を照らしぬ。皺しわの深さよ。眼まなこいたく凹くぼみ、その光は濁りて鈍にぶし。

頭髮も髻も胡麻白にて塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頬は土色せり。哀れいづくの誰ぞや、指してゆくさきはいづくぞ、行衛定めぬ旅なるかも。

げに寒き夜かな。独りごちし時、総身を心ありげに震いぬ。かくて温まりし掌もて心地よげに顔を摩りたり。いたく古びてところどころ古綿の現われし衣の、火に近き裾のあたりより湯気を放つは、朝の雨に霑いて、なお乾すことだに得ざりしなるべし。

あな心地よき火や。いいつつ投げやりし杖を拾いて、これを力に片足を揚げ火の上にかざしぬ。脚絆も足袋も、紺の色あせ、のみならず血色なき小指現われぬ。一声高く竹の裂るる音して、勢いよく燃え上がりし炎は足を焦がさんとす、されど翁は足を引かざりき。

げに心地よき火や、たが燃やしつる火ぞ、かたじけなし。いさして足を替えつ。十とせの昔、楽しき炬見捨てぬるよりこのかた、いまだこのようなるうれしき火に遇わざりき。いいつつ火の奥を見つむる目なごしは遠きものを眺むるごとし。火の奥には過ぎし昔の炬の火、昔のままに描かれやしつらん。鮮やかに現わるるものは児にや孫にや。

昔の火は楽しく、今の火は悲し、あらず、あらず、昔は昔、今は今、心地よきこの火や。いう声は震いぬ。荒ら荒らしく杖を投げやりつ。火を背になし、沖の方を前にして立ち体

をそらせ、両の拳こぶしもて腰をたたきたり。仰ぎ見る大ぞら、晴に晴れて、黒澄くろすみ、星河霜せいかしもを  
つつみて、遠く伊豆の岬角こづかくに垂れたり。

身うち煖あたたかくなりまさりゆき、ひじたる衣の裾すそも袖そでも乾きぬ。ああこの火、誰たが燃やし  
つる火ぞ、誰たがためにとて、誰たが燃やしつるぞ。今や翁の心は感謝の情にみたされつ、老  
の眼まなこは涙ぐみたり。風なく波なく、さしくる潮うしおの、しみじみと砂を浸ひたす音を翁は眼閉まなこじて  
聴きぬ。さすらう旅の憂うれもこの刹那せつなにや忘れはてけん、翁が心、今ひとたび童の昔にかえ  
りぬ。

あわれこの火、ようように消えなんとす。竹も燃えつき、板も燃えつきぬ。かの太き丸  
太のみはなおよく燃えたり。されど翁はもはやこれを惜おしとも思わざりき。ただ立去りぎ  
わに名残惜しくてや、両手もて輪をつくり、抱いだくように胸のあたりまで火の上にかざしつ、  
眼しばだたきてありしが、いざとばかり腰うちのぼし、二足ふたあし三足みあしゆかんとして立ちかえ  
れり、燃えのこりたる木の端はし々はしを搔かきあつ集めて火に加えつ、勢いきりいよく燃え上がるを見て心  
地よげにうち笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅くれなの光を放ちて、寂じやく寞ぼくたる夜の闇のうちにおぼつかなく燃えたり。  
夜更け、潮みち、童らが焼たきし火も旅の翁が足跡も永とこ久しえの波に消されぬ。



# 青空文庫情報

底本：「日本文学全集」2 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月7日初版

1972（昭和47）年9月10日9版

底本の親本：「国木田独歩全集」学習研究社

入力：j.ujiyama

校正：八巻美恵

1998年10月29日公開

2004年6月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# たき火

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>